

Title	インドネシア語の二重主語文 : Gadjah belalainja pandjang
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 26 p.99-p.126
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80427">https://hdl.handle.net/11094/80427</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# インドネシア語の二重主語文

—Gadjah belalainja pandjang—

崎 山 理

## Kalimat Dwi-subjek dalam Bahasa Indonesia

—Gadjah belalainja pandjang—

Osamu Sakiyama

Sebagai sambungan dengan risalah berdjulud „Untnk menjempurnakan perkara aktif dan pasif dalam Bahasa Indonesia” jang dimuat pada *Journal of Osaka University of Foreign Studies* No. 21, 1969, risalah ini djuga saja karang untuk membitjarakan gejala dwi-subjek jang lain dalam B. I. Kali ini, berlainan dengan susunan kalimat seperti „*Andjing itu aku pukul* atau *Aku pukul andjing itu*” —*andjing itu* didalam kalimat ini saja namai subjek pertama ( $=N_1$ ) dan *aku* subjek kedua ( $=N_2$ ), sedjenis kalimat ini boleh dinamakan „kalimat dwi-subjek ergatief” —, kalimat seperti jang disertai djulud risalah ini saja persoalkan.

Kalimat serupa ini djuga, sampai sekarang, tidak diuraikan dengan djitu oleh para ahli tatabahasa, sehingga menjebakkan mereka berpendapat serba-matjam. Saja berani mengatakan bahwa mereka itu, tanpa melihat peristiwa dalam (“internal facts”) se-dalam<sup>2</sup>nja dalam B. I., selalu terikat pada pengertian tatabahasa jang terlalu logis seperti jang di-bahasa<sup>2</sup> Eropah Barat. (Lihat bab II. dimana saja perkenalkan beberapa tjara menguraikan sambil membahasnja.) Pada hemat saja kalimat serupa ini pula mempunyai dua matjam subjek, jaitu *gadjah* subjek pertama ( $=N_1$ ), *belalainja* subjek kedua ( $=N_2$ ), disamping itu *pandjang P* ( $=$ predikat). Walaupun susunan kalimat ini dapat diinversikan mendjadi „*Gadjah pandjang belalainja*” tanpa mengubah artinja, fungsi sedemikian itu sama sadja. Oleh sebab itu kalimat ini saja namai „kalimat dwi-subjek attributief”. Tjiri<sup>2</sup> umum terdapat pada „kalimat dwi-subjek” ini, baik  $N_1$  nja maupun  $N_2$  nja boleh dihilangkan kalau isi kalimat itu sudah djelas atau tidak harus dikatakan lagi, seperti sama halnja dengan „kalimat dwi-subjek ergatief” dimana hanja  $N_1$  dapat ditiadakan. (Lihat bab IV.) Perhatikanlah

„Belalai gajah pandjang” adalah kalimat lain yang mengikuti hukum DM.

Bandingkan: (Perkataan yang dikurung sebetulnja tidak ditulis.)

(uang sebanjak itu) Mamak perniagakan.	— Dr. Hamka
$N_1$ $N_2 \cdot V$	..... k. dwi-s. ergatief
(mas itu) Harganja kebetulan turun sekali.	— A. Pané
$N_1$ $N_2$ $P$	..... k. dwi-s. attributief
Elok benar nama itu (artinja).	— N. St. Iskandar
$P$ $N_1$ $N_2$	..... k. dwi-s. attributief

Terjadinja ellipsis ini membuktikan bahwa pendapat saja, yang mendirikan dua subjek didalam satu kalimat, sama sekali tidak aneh.

Kedua „kalimat dwi-subjek” itu dapat berhubung satu sama lain, umpamanja:

Mulutku sudah bisa kubuka tjukup lebarnja.	— A. Pané
$N_1$ $N_2 \cdot V$	..... k. dwi-s. ergatief
$N_1$ $P$ $N_2$	..... k. dwi-s. attributief

Dengan demikian saja tidak dapat mengakui penggolongan yang diusahakan oleh S. Takdir Alisjahbana, misalnja. Dalam hal ini beliau menganggap kalimat<sup>2</sup> seperti „Harganja turun”, „Nama itu elok” sama sadja, karena keduanya berisikan subjek—predikat. (Lihat, *Tatabahasa Baru B. I. Dj.* I, hlm. 58.) Akan tetapi rupanja dia lupa akan ellipsis pada tiap kalimat. Saja yakin uraian saja seperti tadi itu lebih berkesesuaian dengan kesadaran-dalam pada putera Indonesia.

## I. は じ め に

本学報第21号（昭和44年3月）において、私は、インドネシア語のいわゆる受動形が実は属能的な二重主語文であることを明らかにした。その論旨に対して、幸いにも、内外の多くの人たちから好意的な意見を得ることができ、また、私自身、同国の学生にインドネシア語を授業する際のみならず、インドネシア人に日本語を教授する場合にも、この考えを説明することによって、いささかの教育的効果を上げることもできたと感じるに至った。要するに、西洋の論理的文法範疇を強引に適用しても、それが適用された殊にアジアの諸言語には、実際のその言語使用者の内的意識にそぐわないことが多い。その後、目に触れた論文の中でも、ロシアのРевзинは、最近の生成文法論を無批判的に適用して、インドネシア語のいわゆる能動・受動形を説明しようとする。<sup>1)</sup>しかし、後者は前者の書替えによって導かれ、外形的にいわゆる受動形の出来方を説明するのみであって、受動形そのものの内的機能・内的事実の発見には何ら至っていない。つまりこの

新らしい論によっても、外的手続・操作が煩瑣になった点は別にして、従来の能動・受動論者が考えていたこと以上の何の新事実の指摘をもなし得なかったことになる（‘Nihil ergo magis praestandum est quam ne pecorum ritu sequamur antecedentium gregem, pergentes non quo eundum est sed quo itur.’——Seneca）。

インドネシア語のいわゆる受動形は、能動形からの裏返しの（書替え的）関係にあるのではなく、それぞれが個々独立した文であることを、私は明らかにしたのである。そして、マライ・ポリネシア諸語全般にわたって、ヨーロッパ諸語で考えられているような受動形は存在しないと、あえていい得ようであり、例えば、同じインドネシア語派の中のタガログ語についての Bowen の文法書は、従来のものと比べてその記述に一段と進歩が見られる。<sup>2)</sup>

ところで前論文で、将来の問題として残しておいた属性的な二重主論文について、本稿では、考察しておきたい。周知のごとく、インドネシア語には、格変化・活用もなければまた助詞に相当するものもない。属能的二重主語文の判断の基準となった他動詞化接頭辞の有無とは異なり、属性的二重主語文は、ただ語彙の相関関係および語順によってのみその現象を判断し得ることになる。しかもその語順は、ある程度自由に動くことができる。標題に掲げた文は、「象は鼻が長い」を意味する。しかし、そこに並んでいる各要素は「象・その鼻・長い」を表わすのみである。一方、Belalai gadjah pandjang. (belalai の -nja は不必要) は、「象(の)鼻・長い」を表わす。(インドネシア語における所属関係の表示は、被修飾語+修飾語 [インドネシア語文法でいう「DMの規則」] による。ただし、標題の文が「鼻(の)象」と解釈されることは、論理的に当然あり得ない。連続する二辞項を成立させるためには、前項(B)と後項(A)との関係が、質的に両者が異なるとともに、量的にもA<sup>2</sup>Bでなければならない、従って、その逆は成立しないからである。ゆえに、Gadjah itu belalainja ~. のように指示代名詞的・定冠詞的 itu を添えることによって、その切れ目を一層明確にすることもできる。) ところで、「象(の)鼻・長い」に対して、「象の鼻は長い」と解釈し得るならば（「象の鼻が長い」というニュアンスは、Belalai gadjah itulah (jang) ~. のように、強調的接尾辞 -lah「こそ」、またさらに多機能の jang を付加えることにより、表現できる）、「象・その鼻・長い」は「象は(その)鼻が長い」と解釈し得る、また、解釈しなければならない文であることが分かる。そして、「象に関していえば、その鼻は長い」とか「象はその鼻に関して長い」などの、さらに補足的な品詞をもっていわれる文にこの文が相当しないこと、そのような表現法に相当する文を、インドネシア語でもまたあえて作り得ることに注意しなければならない。標題の又は、Gadjah pandjang belalainja「象・長い・その鼻」のようにその語順を変えてもよい。しかしこの文型もインドネシア語では普通の現象であって、やはり本稿の対象とする二重主語ということが出来る。「象は長い、鼻が」ということは、われわれにとって特殊な場合に限られるけれども、日本語を母国語とするわれわれが、インドネシア語のこのような二重主語文を考察することは、etic 的にも有利な立場にあるといえよう。本稿では両者間の平行性を示すと同時に、その非平行性にも言及するであろう。なお、以

下の例文中には英訳されたインドネシアの文学作品のその英訳を、参考のために煩をいわず掲げた部分もある。その訳文を見る限りでは、インドネシア語の二重主語文的表現が、いかにもそのまま英語に移し得ないかのようなのであるが、本稿はインドネシア語・英語のこの点に関する対照言語学を行なおうとするものではない。また以下において、前論文で第Ⅰ・第Ⅱ主語を  $N_1$ ,  $N_2$  としたのと区別して、イタリックの  $N_1$ ,  $N_2$  とし、引用例はその出典のいかんにかかわらず、特に註記するものを除いて、すべてインドネシア語式綴字に統一する。

## Ⅱ. 諸家の説明およびその批判

このような文型は、殊に西洋語を母国語とする人々にとって、また西洋語における文法的用語を無批判に適用してそれでよしとするそれ以外の言語を母国語とする人々にとって、相当、理解・説明が困難な現象であるかのようなのである。この文型について完全な説明を行なっている文法書はなく、また、全然触れていない書物も多い。自らの持つ母国語の文法形式が、他国語の記述においていかに大きく影響し、それに左右されるかの一つの例といえよう („Sprachgebundenheit“)。例えば、Whorf は、日本語に関してではあるが、二重主語文が存在することについて、英語の話し手には考えられないことだとしている。<sup>3)</sup>にもかかわらず、このような二重主語文的現象が広く世界の言語に存在しないというわけではない。特に本稿で取上げる属性的場合について、泉井久之助氏の適切に述べられた諸論文がある。<sup>4) 補1)</sup>

本章においては、若干の代表的見解を紹介し、検討しよう。

Mees<sup>5)</sup>: 彼の考えは次のようである。

Lampu itu terang *njalanja*. 「そのランプは炎が明るい」

Kuda itu sudah kuat *djalannja*. 「その馬は歩みがしっかりしていた」

などの文は、

Buku ini *kiriman* paman. 「この本は伯父の贈物(だ)」

Kandang itu *buatan* ayah sendiri. 「その檻は父自ら作ったもの(だ)」

のような文と同じになる。イタリックにした部分は、名詞であるにもかかわらず、これらの文において述語として用いられている。また、この場合の述語には強調のアクセント „*nadruk*” が置かれる点でも共通する。(ただし、このアクセントの説明については、Pané の反論があり、<sup>2)</sup> 後例で *kiriman*, *buatan* にアクセントが落ちるとすれば、それはこれらの語が主語となった場合に限る。つまり、「伯父の贈物は～」、「父自ら作ったものは～」のように。) ゆえに、彼によって、これらの文は、名詞的述語 „*gezegde door zelfstandige naamwoorden*” を持つものとして一括される。いかにもイタリックの部分に当たるオランダ語も述語である。それぞれ、*Die lamp brandt helder.*, *Die paarden lopen al hard.* / *Dit boek is een zending van oom.*, *Dat hok*

was maakesel van vader zelf. しかし、この前例・後例が内的機能を全く異にする文であること、すなわち、後例は何ら属性関係を表わす文ではなく、また、前例では terang, kuat が述語となっているのに反し、後例は、インドネシア語では普通の述語を欠く（例えば adalah 「である、だ」のような）文であることに、彼は気付いていない。

Pané<sup>7)</sup> : 書物の前後において趣旨が一貫しない。書物の終りでは、

Saudagar ini mati anaknja. 「この商人は子供が死んだ」

Tanah seberang itu terlalu putih pasirnja. 「(ジャワ島以外の) 外領は砂が真白だ」

という文は、mati, terlalu putih が主語 „pokok kalimat”, anaknja, pasirnja が述語 „praedicaat”, saudagar ini, tanah seberang itu が付加語 „penegas jang diisoler, bepaling” であるという。彼は、「この商人において死んだのは子供だ」、「外領で真白なのは砂だ」というように解釈しているかである。ところが前の部分においては、まず、次のような文を掲げ、

Tingginja gunung 1000 meter. 「山の高さは千メートルだ」

Nama dokter itu telah masjhur. 「その医者の名前は有名だった」

Njala lampu itu terang. 「そのランプの炎は明るい」

これらの文では主語が合成語 „madjemuk” よりなり、アクセントは合成語のうちの修飾語（つまり gunung, dokter, lampu）に置かれる。しかしそのような修飾語の強調の度が増すと、それはついに独立して文の主語として立ち、一方、被修飾語（つまり tingginja, nama, njala）も被修飾関係を脱して自立するから重要とみなされて、それが独立的用法 „zelfstadig gebruikt” であることを明示するために -nja が添えられ、結局、以下の文ができあがる、とする。

Gunung 1000 meter tingginja. 「山は高さが千メートルだ」

Dokter itu masjhur namanja. 「その医者の名前が有名だった」

Lampu itu terang njalanja. 「そのランプは炎が明るい」

彼の誤解は、後例が前例から「変換的」に得られるとしている点にあること、また、彼の説明によれば、後例の -nja は独立的用法の指示辞として必然的に要求されることになるが、 $N_2$  に接尾する -nja は「その、それらの」を意味して  $N_1$  を繰返し指示しているにすぎず、特にそれがなくとも、この位置に立つ名詞的類は  $N_2$  であることに変りはない。ただし、名詞的類でない語彙は、 $N_2$  として機能するために、当然名詞化されなければならないから、その場合には、-nja の持つ名詞化の機能によって (tinggi 「高い」: tingginja 「高さ」、manis 「甘い」: manisnja 「甘さ、甘み」などのように)、それが接尾されなければならないことになる。にもかかわらず、前例の tingginja gunung の位置における tingginja の -nja は不要であるという意見もある。<sup>8)</sup> Pané もそれを認めている。この場合の tinggi は形容詞ではなくそれ自身で抽象名詞であるという。<sup>9)</sup> ここの -nja を落してもよいのは、他の名詞的類の結合の仕方への類推もあるが、実はそれに一・二人称による表現形式が大きく関係している (III. 3. iii. 参照)。しかも、インドネシア語における品詞間の区別は流動的であることを物語る。ゆえに、Zain は、以上のことをまとめ

て簡潔に、形容詞または動詞に続く語彙がない時 -nja を必ず必要とする、という説明を行なう。<sup>10)</sup>

Fokker<sup>11)</sup> : まず *Beknopte Grammatica* に見られる限りにおいては、Mees などのように全く異なる文を同一の機能を持つ文型とは考えていず、その点で進歩は見られる。しかし、

Radio dengan tiba<sup>2</sup> berhenti suaranya. 「ラジオは突然音が消えた」

のような文における  $N_2$  (=suaranja) と述語 (=berhenti) とが合成的述語 „samengesteld gezegde” (Pané はこれを節 „zinsnede” と解釈する<sup>12)</sup>) をなすとする点で問題がある。ところで彼は、この考えを変えることなく、*Inleiding* において新たな概念を導入し、今仮に論理的主語 „subject (S)”, 論理的述語 „predicaat (P)”, 文法的主語 „onderwerp (o)”, 文法的述語 „gezegde (z)” とすると、

Atap rumah itu seng. 「その家の屋根はトタンだ」 は atap rumah itu が S, seng が P となるのに対して、

Rumah itu atapnja seng. 「その家は屋根がトタンだ」

は rumah itu が S, atapnja seng が P, また atapnja は o, seng は z という構成になる。そして、彼は、前例を第 I 型 (S/P), 後例を第 II 型 ( $S/\frac{P}{(o)z}$ ) に属する文として区別する。ここに掲げられた第 II 型は、前例・後例に見られるように、同じ要素からなりながら、S となり得るものには選択性があり、従って彼は、このような S の機能を選択的主語 „keuze subject” と名付ける。しかし、この第 II 型に属するのは、二重主語文のみでない。彼の辞式化によって、例えば、

Orang jang melanggar aturan itu, ia dihukum berat. 「その規則を犯した人、その人は厳罰に処せられた」<sup>13)</sup>

も、orang jang melanggar aturan itu が S, ia dihukum berat が P, また、ia は o, dihukum berat は z となって、やはりここに含まれる。このような文と先の文とは明らかに性格は違うが、Fokker の根本的な誤解は、先の文の後例においても atapnja の -nja は rumah itu (=S) を指していると同じく、この文においても ia は orang jang melanggar aturan itu (=S) を指している (!! ) と考えた点に存する。要するに、これは同格文であり、ia は orang ~, の属性に言及するために置かれているのではない。一方、

Hari itu barang dagang laris benar. 「その日は商品がよく捌けた」

Hari itu laris benar barang dagang. 「(同意)」

のような文は前例が、Hari itu=S, barang 以下=P, また、barang dagang=o, laris benar=z となって先の第 II 型になるが、後例は o, z の関係が逆になり、つまり  $S/\frac{P}{z(o)}$  と辞式化できる第 VII 型に分類される。しかし、この場合も、第 VII 型に含まれるのは、このような二重主語文のみではない。

Surat anak muda itu ia sendiri jang membalasnja. 「子供の手紙は、彼自身がそれに (= -nja)

返事をした」

のような二重目的語文も、彼によれば surat anak muda itu=S, ia sendiri 以下=P, また, ia sendiri=z, jang membalasnja=o となって（この分析に従えば、「子供の手紙は、それに返事をしたのが彼自身だ」ということになるが、このようにこの文を解釈するのは誤りである）、やはりここに含まれる。しかし内容的には全然別の文である。

要するに、彼の分類法も、一部分、第Ⅱ型に属する文のSとo（つまり二つの主語）を見抜いているかに見えながら、全体として、外面的形式をあまりに重視しすぎて内容への配慮が欠け、また、二重主語文への認識すらなかったことは、同じ形式の文を第Ⅱ・Ⅶ型のように分けていることから明らかである。

Kähler<sup>14)</sup>：彼は、-nja の機能に関連させつつ、この形式に触れるのみであって、-nja はしばしば強調のアクセント „Hervorhebung“ に応じて現われることを指摘し、また、意味的に -nja の付加された語彙は「に関して」 „was…betrifft“ ということを実際たせるとする。従って、

Tanahnja negeri ini subur. 「この国の土地は肥えている」

Negeri ini tanahnja subur. 「この国は土地が肥えている」

Negeri ini subur(lah) tanahnja 「(同意)」

のような文は、後二文が最初の文から転換 „Inversion“ してできたわけであるから、それぞれ、der Boden von ihm, diesem Land, ist fruchtbar/(was) dieses Land (betrifft), sein Boden ist fruchtbar/(was) dieses Land (betrifft), fruchtbar ist sein Boden = der Boden dieses Landes ist fruchtbar のようになって意味は同じことになる。ここには重大な誤解が二つある。まず、tanahnja negeri ini は、DMの規則によって訳文に示したように「この国の土地」を意味するにしかすぎないこと（従って、彼の訳は誤りである）、そしてこの場合、語彙間に -nja を付加することは、少なくとも正しいインドネシア語として認められていないということである。<sup>15)</sup> また、-nja について「に関して」という意味を付するのは、行過ぎである。-nja は  $N_1$  を反復しているにすぎず、あえていうなら、 $N_1$  にこそ「に関して」という内的意味は認められるであろう（つまり「この国に関しては土地が肥えている」）。要するに、negeri ini を S, subur を P とみなす限りにおいて、tanahnja の処置に彼も窮しているのである。少なくとも二つの主語という現象は、西洋人に考え難いのであるから。

Sarumpaet/Mackie<sup>16)</sup>：同じく -nja について言及する中で、述語（一般に性質・分量を示す）を主語に関係づけるのに -nja が働く、というのみであって、

Anak itu satu setengah meter tingginja. 「その子供は高さ（＝背丈）が一メートル半だ」

Tingginja anak itu satu setengah meter. 「その子供の背丈は一メートル半だ」

を等しく The boy is one metre and a half tall. と訳し、何らの新らしい指摘も行なっていない。

Lewis<sup>17)</sup>：生成文法論をマライ語（本現象に関して、マライ語・インドネシア語間に相違は存



在しない)の文型の整理に適用する彼女は、S(=Subject), P(=Predicate), C(=Complement), A(=Adjunct)(それぞれ, clause structure の要素となることができる)のような要素を含み、かつ、Pが動詞またはその統語論的相当語“syntactic equivalent”である文を、動詞節“verbal clause”と名付けて、<sup>18)</sup> その中に本稿で説く二重主語文も入れてしまう。つまり、非受動陳述文“non-passive declaratory”において、

Dia memberi buku kepada saja.「彼は本を私に与える」

Bulan depan saja hendak mengawinkan anak.「来月私は子供を結婚させるであろう」

のような文は、それぞれ、dia, saja がS, memberi, hendak mengawinkan がP, buku, anak がC, kepada saja, bulan depan がAである。このような文と同じ要素を持つものとして、

Suami terlalu sugul mukanja.「夫は顔が大変気むずかしい」

Rotan baik harga sekarang.「籐は、今、値がよい」

のごとき二重主語文も解釈される。すなわち、それぞれ、suami, rotan がS, sugul, baik がP, mukanja, harga がC, terlalu, sekarang がAのように分析されるからである。<sup>19)</sup>ただし、後例の上文における mukanja は、muka が既に名詞であるにもかかわらず、-nja が付加されている(harga には -nja は付いていない)。一方、Dia sugul muka.「彼は不機嫌だ」(このいい方は、muka が  $N_2$  としての独立性を失なってsugul と合成し、いわば一つの成句と化したのである。これについては後述する。Ⅲ. 3. ii. 参照)ともいえるから、この場合にこそmuka はCに相当する。従って、名詞が -nja を伴って明示化“specific”された時、これをCとするのはあまり適切でなく、mukanja をS, terlalu sugul をP, suami をT(=statement of topic)のように、さらにTを導入すべきだが、そうすることによって新たな文の要素を立てなければならないから、合法的解決“legitimate solution”とはいえない、としている。しかしながら、上の前例・後例は、内容形式のみならず表現形式においても全く性質を異にする文であり(前文の buku, anak は dia, saja の何の属性的関係をも示さない。また、memberi, mengawinkan は他動詞であって、buku, kepada saja, anak はそれぞれの目的語である)、それを同文としてまとめてしまうのは間違いであるばかりでなく、また、彼女が非合理として排除したTなる概念も(その萌芽は Fokker の考えにおいて見られた)、依然として英語からの被拘束性を物語るのみで、マライ語の深い内的事態を何らあばくものではない。

なお、同じく生成文法を適用した Asmah の文法書は、マライ語において典型的なこの文型に全く言及しない。少なくともこの点で大きな手落ちというべきであろう。ただし、述語が ke—an 形式の場合にのみ、それについて触れている。

Anak ketjil itu kematian ajahnja.「子供は父が亡くなった」

しかし、この形式も彼女のいわゆる“verbal forms”に含められ、それを The child has lost his father とのみ訳していることから、分類法上の大体は推量することができる。(その英訳に対してインドネシア語が忠実であるなら、むしろ Anak ketjil itu menghilangkan ajahnja.「子供は

父を失った」であるべきであり、この両文は自づからその持つ機能が違う<sup>21)</sup>。

要するに、生成文法論を恣に適用することによっても、何ら内容面での重大な事実の発見には至らず、事態は逆に、かえって従来からの退化的様相を呈し、また、初歩的な誤解をすらこれらの人たちはあえて犯していることになる。外的形式の開発を目差す点において、生成文法も構造主義的方法と変りがない。そして内容面への顧慮が欠けた記述は、そのいうところが、事実在即して、貧弱で乏しい。

Phillips<sup>22)</sup>: インドネシア語における二重主語文的現象をテーマにした論文を発表したのは、私の知る限り、彼が嚆矢である。しかし、遺憾ながら、その問題の取扱い方、その解釈の仕方には、大いに問題がある。まず、彼は、T (=Topic) なる概念を “additional clause-element” と定義して導入し、それによって、S (=Subject), P (=Predicate), C (=Complement) のみによる択一的分析 “alternative analyses” よりもはるかに優れる、とする。そして、それぞれの符号の振当て方は次のようになる (彼は “Topic clause” を “verbal clause” (=v. c.) と “nominal clause” (=n. c.) とに別け、Tは必ず名詞 [名詞句・名詞節]、S、Cは名詞 [名詞相当語]、Pは名詞 [名詞相当語]・動詞・前置詞句、のように品詞的振分けを行って類型を立てる)。

i. S = 名詞

Sawah itu Ali mentjangkulnja. (=v. c.) 「その田、アリはそれを (= -nja) 耕す」

Buah ini, rambutan namanja. (=n. c.) 「この果物は名前がランブタン (nephelium lappaceum) だ」

ii. S = 名詞相当語

Perkara ini susah menjiasatnja. (=v. c.) 「この事件はそれを (= -nja) 調査することが困難だ」

Rumah saja atapnja seng. (=n. c.) 「私の家は屋根がトタンだ」

において、i は、それぞれ、sawah itu, buah ini が T, Ali, rambutanがS, mentjangkul, namanja が P, また、mentjangkulnja の -nja は C と分析され、ii は、それぞれ、perkara ini, rumah saja が T, menjiasatnja, atapnja が S, susah, seng が P と分析される。しかし、i の上例は、二重目的語文であり、下例の二重主語文と平行的にみなすことはできない文であるのみならず、ii の上例についても、実はこれも二重目的語文であり、そして menjiasatnja 「それを調査する」の実際の主語がここでは省かれていることを、彼は見逃している。menjiasatnjaはこの文で彼のいうSではなく (Sとするためには、siasatnja 「その調査」としておけばよく、あえて他動詞化の接頭辞 me- を付ける必要はない)、Pである。つまり、Perkara ini orang susah menjiasatnja. とでもすれば完全になる文であって、「この事件、人はそれを (=nja) 調査することが困難だ」と解釈しなければならない文である。ところで、問題はこれにとどまるのみではない。マライ語の語順の自由さは、

v. P = 名詞

Buah ini namanja rambutan. (=n. c.) 「この果物は名詞がランブタンだ」(彼は、rambutan の代りに nanas 「パイナップル」としているが、以下の説明のため、このように変える)

vi. P = 名詞相当語

Bilik ini sepuluh kaki pandjangnja. (=n. c.) 「この部屋は長さが十フィートだ」

のようにすることもできる。これに対して彼は、buah ini, bilik ini が T, namanja, sepuluh kaki が S, rambutan, pandjangnja が P であるとするのである。先の i. では rambutan が S であったに反して、この場合、P とされなければならない理由を、彼は述べていないけれども、何故、このように恣に解釈するのか。それは、文を構成する全要素が名詞または名詞相当語である場合(つまり、n. c. の場合)に、このような混乱が起こっているようであり、この時のみはマライ語の語順が各要素の機能決定のための重要な意味を帯びていると考えていることは、彼の英訳にもうかがわれる(i. This fruit, rambutan (is) its name, v. This fruit, its name (is) rambutan)。P が名詞的類の場合には、彼は英語の拘束力から脱することはできなかったが、P になり得る要素がそれ以外の場合、語順に関係なく、一応は正しい解釈が与えられている。例えば、彼の分類になる B II vii (=v. c.) の文は、

Ahmad itu beraninja termasjhur. 「アフマッドは勇気が有名だ」

Beraninja termasjhur Ahmad itu. 「(同意)」

Ahmad itu termasjhur beraninja. 「(同意)」

Termasjhur beraninja Ahmad itu. 「(同意)」

すべて、Ahmad itu が T, beraninja が S, termasjhur が P と分析される。

要するに、 $N_2$  に相当する要素を Lewis などのように C とせず、一部分正しく S とし、また、 $N_1$  に相当する S と一般的にされてきた要素を T とした点では、一歩前進しているけれども、T を “additional clause-element” として、いかにもそれが文からはみ出しているかのごとく考えている点で、事実への認識不足がみられる。このことについては後述するけれども、必要に応じて、 $N_1$  (つまり彼の T) のみならず  $N_2$  (つまり彼の S) も省略することができる。例えば、Pohon itu tinggi (tingginja). 「その木は(高さが)高い」において、tingginja (=  $N_2$ ) をあえていわないのが普通である。つまり、現実に対処して既に明確な事柄は、 $N_2$  に関しても省略され得ることに注意しなければならない(IV. 1., 2. 参照)。このことを無視して Pohon itu tinggi. が、もし仮に SP (つまり  $N_2$  P) (TP [つまり  $N_1$  P] ではなく) と分析されるなら、それは誤りである。なお、彼が示した T, S, C, P 各要素の “sequences” による v. c. 18 形, n. c. 2 形の組み合わせも大きく修正せざるを得ないが、ここではその煩を避けたい。

### III. 二重主語文とその形式

本稿においても、私は、論理的主語、心理的主語、あるいは Topic などといった概念を認めない。要するにそれらは、文の主語は一つであるという前提を崩すまいとして詮索された理屈であって、そのような前提こそ、根本的に検討し直されなければならない事柄であろう。固定概念に固執しては、具体的事実の発見はない。インドネシア語の二重主語文における二つの主語は、一方が心理的で、一方が文法的であるというような決定的理由をそこに付することはできない。いえば、それは、こじつけである。いずれも述語に対して直接的関係に立っている点では同じであり、また従って、あえていう必要のない場合は、そのいずれかが省かれ得る点でもその機能は同じである。そしてそのような主語が立つのは、最多で二つとは限らない。日本語でも、以下のような場合、よほど表現しにくくはなるけれども、主語が三つ立つことができる場合すらある(三重主語文 „kalimat tri-subjek”)。

Tje Hasan itu, abangnja kehilangan rumah. 「ハサンさんは、兄が家が無くなった」<sup>23)</sup> (この文型は「ハサンさんの兄は～」で決していないことに注意されたい)

このような二重主語文的表現法は、インドネシア語(マライ語)において、その歴史とともに古い。碑文に見られる限り、この現象は既に現われている。例えば、最古に属する Talang Tuwo 碑文(シュリヴィジャヤ王国時代、西暦 684 年)には、次のような例が見える(ただし、後に述べる潜在的二重主語文である。1. 参照)。Coedès の転写法のまま、掲げる。<sup>24)</sup>

savañakña yaṃ nitānaṃ di sini, ñiyur pinaṃ hanāu, rumviya dñan samiçrāña yaṃ kāyu nimākan vuahña 「ここに植えられたもののすべては、椰子・板榔(Areca catechu)・砂糖椰子(Arenga saccharifera)・サゴ椰子(Metroxylon sagus) および(木は [=kāyu]) その実が(=vuahña) 食用となる各種の木(である)」

また、インドネシア語には直接つながらないけれども、古ジャワ語すなわちカウィ語には、殊にこの例が多い。<sup>25)</sup>例えば、

Hana sira brāhmaṇa, bhagawān Dhomya ngaranya 「(婆羅門 [=梵志] は [=brāhmaṇa]) その名が(=ngaranya) ドホミヤ師 [=世尊] という婆羅門がいた」  
tangkulak tan hēntya hrūnyān pinanahakēn 「(簍は [=tangkulak]) 矢が(=hrūnya) 尽き  
ない簍が用いられた」

その上、N<sub>1</sub> が省かれることも頻繁である。<sup>26)</sup>

Mojar ta ya sarāgāsēmu guyu, nihan lingnya 「彼女(=羅刹の娘ヒディンビー)は艶っぽく  
微笑みながら云った。その言葉が(=lingnya) このようであった」

既に明らかにしてきたように、インドネシア語(またその同系言語)には、二重主語の現象が認められる。しかし、第Ⅱ章で紹介した人たちはすべて、それを認識することができなかった。ところが、インドネシア人 Munaf が行った次のような分析は、二重主語なる概念が本国人にとっても、決して奇異ではないことを物語るものといえよう。<sup>27)</sup> すなわち、主語の類型の一つとし

て考えられた彼が繰返し主語 „pokok berulang” と名付けるそれであって、

Anak itu baik kelakuannja. 「その子供は行儀がよい」

なる文は, anak itu が文初の主語 „pokok bermula dalam kalimat”, baik が述語, kelakuannja が文初の主語を説明する主語 „pokok jang mentjeritakan pokok bermula” とされる。つまり, 控目ながら一文における二つの主語を認めているかのようである。(ただし, 同書内で論旨が首尾一貫せず,

Orang itu pandjang akalnja. 「〔直訳的に: その人は思慮が行届く [=長い]〕その人は用意周到だ」(この種の文については, 3. ii. 参照)

なる文は, 先の文と同型であるにもかかわらず, akalnja が主語, pandjang が述語, orang itu が主語の修飾語 „keterangan pokok” と分析されてしまう。<sup>39)</sup>しかし, この文は akal(nja) orang itu 「その人の思慮」とは根本的に違う。けだし, 考えが徹底できなかった点を遺憾とせざるを得ない。

ここに, 第 I, 第 II 主語をそれぞれ  $N_1$ ,  $N_2$  (日本語では, それぞれ, 助詞, は, が, によって表現される), 述語を  $P$  (=predicate) と符号化すると, 属性的二重主語文の形式は,

$N_1-N_2(nja)-P$  または  $N_1-P-N_2(nja)$  または  $P-N_1-N_2(nja)$

のように表わすことができる。インドネシア語における語順の自由さは, この形式のいずれを取ることでもできるが,  $N_2(nja)-N_1$  なる語順は, もはや二重主語文ではあり得ないことを, 既に明らかにした。 $N_1$ ,  $N_2$  ともに, それが主語として立ち得るからには, それは必ず名詞的類(動名詞を含む)でなければならないが,  $P$  は, 動詞的(他動詞を含まず)・形容詞的類のみならず, 副詞的・名詞的類によっても構成される(本章の 4. 参照)。この形式を基本形式(頭在的の二重主語文)と名付けることにする。ところで,  $N_2$  に接尾される -nja は, 絶対に必要なものではない。落されることもしばしばである(これについては, 2. 参照)。基本形式の例として,

Katak tepi air punggungnja kotor. (Peri, 2273 b) 「水辺の蛙は背中が汚ない(知識該博であっても, 自らにはそれが何も益とはなっていない人)」

Bak manik putus talinja. (Peri, 1783) 「首飾り(=manik)は糸が(=talinja)切れたように(悲しさではらはら落ちる乙女の涙)」

Gedang kaju gedang bahannja. (Peri, 1232) 「大木は木屑が大きい(人増せば水増す)」

Tong kosong njaring bunjinja. (Peri, 2951) 「空桶は音が甲高い(大言壮語)」

sekaliannja negeri itu semuanja habis takluk kepada baginda. (SM, p. 12) 「あらゆる国々は皆が(=semuanja)陛下に服従してしまった」

ada dua orang perempuan berladang, Wan Empuk seorang namanja, dan Wan Malini seorang namanja. (SM, p. 22) 「畑仕事中の女性二人がいた。一人は(=seorang)名前が(=namanja)ワン・ウンプック, 一人は名前がワン・マリニであった」(この形式は,  $P$  (=Wan Empuk)- $N_1-N_2$  njn である)

Bahasa Indonesia memang erat sekali hubungannja dengan Revolusi Indonesia. (Sing, p.

11) 「インドネシア語は、もちろん、インドネシア革命と関係が(=hubungannja)大変深い」  
madjalah Pudjangga Baru dilarang terbitnja. (Jas, p. 49) 『新文学者』誌は発行が禁止された」  
baik angkatan sebelum perang maupun sesudahnja keduannya sangat romantis. (Jas, p. 57)

「戦前・戦後の世代は両者が(=keduannya)非常に浪漫的であった」

hampir tiap<sup>2</sup> murid ber-lain<sup>2</sup> kadjinja. (Isk, p. 15) 「殆んどそれぞれの生徒は課業が異なっていた」  
anak<sup>2</sup> laki<sup>2</sup>, matanja ber-sinar<sup>2</sup>. (Isk, p. 93) 「少年たちは目が輝いた」

Kiasan, pepatah dan ibarat bersimpang-siur maksudnja. (Isk, p. 223) 「比喩・格言・隠喩は意味が錯綜してくるのだった」

Menghilang dalam gerombolan banjak untungnja. (Lub, p. 40) 「群集の中に埋没することは裨益が多い」(There was much to be said for losing one's identity in the herd.)

Massa begitu sadja tidak ada artinja. (Lub, p. 40) 「頭数が多いというだけの集団は意味がない」(in themselves they are meaningless.)

Dia dulu djuga susah tumbuhnja. (Pan, p. 115) 「それ(=齒)は以前も生えるのが難儀であった」(He had trouble too when his was coming in.)

Kalau sambal kurang enak rasanja, (Ham, p. 46) 「もし薬味は味が美味しくなかったら」  
(If a relish was unappetizing,)

#### 1. 顕在的・潜在的二重主語

上の基本形式は、明瞭にその二つの主語性を表わすから、その現象は顕在的である。しかし、一方で、この基本形式が文の各機能部、すなわち、主語・述語・目的語・補語に組込まれることもできる。この場合、基本形式はそれのみで一つのまとまりをなすことを明確にするため、jangの機能の一部、その関係代名詞性がここに援用せられ、 $N_1$ の後にjangが一般に置かれることになる。その形式は、

$N_1$ —jang— $N_2$ (nja)— $P$  または  $N_1$ —jang— $P$ — $N_2$ (nja)

となる。(P— $N_1$ — $N_2$ (nja) がこれに荷担することはない。P が文頭に立ってしまっている以上、それは、文の他の機能と抵触するからである。)これを、顕在的・潜在的二重主語と呼ぶことにしよう。ただし、 $N_1$ の後にjangを添える用法は、現代語で一般化しているが、古語ではその使用がまだ徹底してはいなかった。(先の Talang Tuwo 碑文に見える yamも形のみは現代語のjangに引継がれるが、その機能における関係代名詞性はまだ低く、潜在的二重主語部分のyamも後文を導くための接続詞 [=that] にすぎない。<sup>20)</sup>jangの関係代名詞的機能が意識され大きく現われてきた原因の一つに、西欧語[殊にオランダ語、英語]の影響を掲げることができよう。そしてこれは現代語と古語との間の大きな文法的違いの一つである。)例えば補語において使われたその例、<sup>20)</sup>

Maka ada ditengah rimba itu serumpun betung terlalu amat tebalnja betung itu. 「森林の中に一株の大竹があったが、その大竹は(=betung itu)太さが(=tebalnja)この上もなか

った」

のように jang を用いる代りに、補語 betung を重複させるか、

maka iapun amat sukatjita melihat kanak<sup>2</sup> itu terlalu amat baik parasnja itu.「彼(=次王)はまたその子供を見て大層お喜びになったが、(その子供は)容姿がこの上なくよろしかった」では、目的語 kanak<sup>2</sup> を itu で一度切り、kanak<sup>2</sup> itu が再び主語(=N<sub>1</sub>)となって後に続く形を取っている。これらの文は、現代語で、それぞれ、～ serumpun betung jang terlalu amat tebalnja, ～ kanak<sup>2</sup> jang terlalu amat baik parasnja itu といわれるであろう。ただし、現代語においても、N<sub>1</sub>—jang が必ずしも文中に潜んでいるのみではなく、独立して一文としても用いられることは次の例からも知ることができるが、この場合には顕在的とは異なって、この一文にはまた一句としての多様な機能(主語・述語…のいずれかを決定できないような)が負託されていることが分かる。

Mobil truck tuan Hamidy itu djelas benar sebuah mobil serobotan. Mobil jang tidak tentu asal-usulnja lagi. (Lub, p. 62)「ハミディ氏のトラックは継接であることが明らかだった。(車は [=mobil]) どこがもとのメーカーかが(=asal-usulnja)もうはっきりしない車」(Hamidy's truck was a patchwork affair. Its pedigree was lost forever.)

文中の機能別による若干の例。

主語中：

Dan Mr. Kamaruddin jang telah tua dan sama sekali tidak ada pengaruh dalam masjarakat tidak dapat dipakai oleh Belanda. (Lub, p. 44)「既に年老い、社会的影響力が(=pengaruh, -nja は付加されず)全くなかった法学士カマルッディン(=Mr. Kamaruddin)は、オランダ側によって登用されることもなかった」(And so the Dutch had no use for Mr. Kamarudin who was old, and had no influence whatever.)

Disekeliling danau ini ada hak-milik nenek, —tanah jang amat banjak hasilnja.) Isk, p. 217)「この湖を取巻いて、財産所有権、つまり、産物が(=hasilnja)きわめて多い土地(=tanah)が、あった」

Djikalau ada kepadamu sebuah kitab tulisan tangan jang penuh dengan perkataan jang berguna dan jang halus lagi terang bahasanja dan elok pula karangannja serta betul sekali hurufnja, (SM, p. xxvi)「もし汝に、有益でかつ言葉が(=bahasanja)上品・明瞭、また内容が(=karangannja)美しく、文字が(=hurufnja)正しい物語(=perkataan)で満ち満ちた手稿本が、あるならば」

目的語中：

Isterinja pandai menahan hasrat alam jang dikandung tubuhnja jang muda dan penuh api hidup itu. (Lub, p. 27)「彼の妻は、若くて命の火が(=api hidup, -nja は付加されず)溢れんばかりの体(=tubuhnja)のうちに閉籠められた自然的欲望を、うまく制御していた」(She

had been able to restrain the natural longing implanted in her youthful body full of the fire of life.)

Aku tahu, sering djuga gigi sematjam itu lambat datangnja. (Pan, p. 106) 「そのような歯は (=gigi sematjam itu) 生えるのが (=datangnja) しばしば後れることを、私は知った」 (I knew that snch teeth were often slow to appear.)

Kemarin pagi ada orang mengatakan bahwa ajahku telah tentu tempat tinggalnja. (Ham. p. 53) 「私の父は (=ajahku) 居所が (tempat tinggalnja) 定まったと、云う人が昨朝いた」 (The other morning somebody said that he knew for sure where my father is living.)

補語中：

tetapi bagi mereka jang kuat tulang belakangnja sendiri adalah mengatasi segala tupangan itu kemauan, tjita<sup>2</sup> dan kejakinan jang ber-njala<sup>2</sup>, jang ber-kobar<sup>2</sup> didalam hatinja. (Pol. p. 14) 「しかし、自らの背骨が (=tulang belakangnja) しっかりしている人々 (=mereka) にとって、そのような突支棒に優先させるに自らの心の中で激しく燃上がる意志・抱負・確信をもってする」

ketika kami sampai pada sebuah djambatan sungai jang tohor airnja, (Isk, p. 49) 「水が (=airnja) 浅い川 (=sungai) にかかる橋に、われわれが着いた時」

Dalam zaman Belanda dan Djepang dahulu Hazil adalah seorang anak jang baik benar kelakuannja. (Lub, p. 43) 「かつての蘭・日時代には、ハジルは、品行が (=kelakuannja) 誠に良い子供 (=seorang anak) であった」 (Under Dutch rule and during the Japanese occupation Hazil had always been a well-behaved child.)

tahun itu bertalian pula dengan kedjadian<sup>2</sup> jang tidak semuanya menjenangkan hati, (Jas, p. 47) 「その年は、すべてが (=semuanya) 喜んでばかりはいられない事件 (=kedjadian<sup>2</sup>) とも関係している」

述語中：

述語となり得る潜在的二重主語文は、上の補語中の Lubis の例における adalah が省略されれば、直ちにそうなるように、強調的に adalah が置かれるか置かれられないかによって、両機能間を移項することになる。

Hanja aku seorang tua jang tidak berpengaruh, dan telah habis gunanja, pikir Mr. kamaruddin dengan pahit. (Lub, p. 44) 「私は、何の影響力もなくまた役目が (=gunanja) が終わった一介の老人 (=seorang tua) にしかすぎないと、法学士カマルッディンは悲しげに考えた」 (I am only an old man without influence whose usefulness is finished, thought Mr. Kamarudin bitterly.)

なお、前論文で明らかにした属能的二重主語文の  $N_1$ ,  $N_2$  と、本稿の  $N_1$ ,  $N_2$  とが、相互に無関係的であるわけでない。 $N_1$ ,  $N_2$  に  $N_1$ ,  $N_2$  が組込まれる場合もある(ただし、di—(nja)



(oleh) 形式においてのみ現われることができる)。まず、理論的には、

Ahmad itu termasuk beraninja. 「アフマッドは勇気が有名だ」( $N_1-P-N_2nja$ ) が、 $N_1$  となつて、

Ahmad yang termasuk beraninja itu dibunuh(nja). 「勇気が有名なアフマッドは、ある人が殺した(ある人に殺された)」( $N_1 [=N_1-jang-P-N_2 nja] - N_2 \cdot V$ , ただし  $N_2=di$ ) なる表現ができるし、さらに、

Ahmad yang termasuk beraninja itu dibunuh (oleh) pengkhianat yang Hassan namanja. 「勇気が有名なアフマッドは、名前がハッサンなる裏切者が殺した」( $N_1 [=N_1-jang-P-N_2 nja]-N_2 \cdot V$ , ただし  $N_2=di [=N_1-jang-P-N_2 nja]$ )

という言い方も可能である。ここでは次の文を検討しよう。

Sajur ini semuanya dia beli.<sup>31)</sup> 「この野菜はすべて(が)、彼が買った(彼に買われた)」

まず、属能的に sajur ini semuanya は  $N_1$ , dia beli は  $N_2 \cdot V$  となる。しかし、 $N_1$  は属性的な  $N_1=sajur ini$ ,  $N_2=semuanya$  によって構成されている。そして、 $N_1$ ,  $N_2$  の  $P$  は dia beli である。結局、この文の結構は、 $N_1 [=N_1-N_2]-N_2 \cdot V [=P]$  ということになる。

Mulutku sudah bisa kubuka tjukup lebarnya. (Pan, p. 124) 「自分の口は、もはや私が開くことができたが、その広さが充分の程度にである」(I could now open my mouth wide enough.)

この文では、属能的に mulutku は  $N_1$ , kubuka は  $N_2 \cdot V$  となり、属性的に mulutku (sudah bisa) kubuka は  $N_1$ , lebarnya は  $N_2$ , tjukup は  $P$  となっている。つまり  $N_1 [=N_1-N_2 \cdot V]-P-N_2 nja$  という結構である。このような表現の可能性がある点に、インドネシア語文法の難しさが、実は存している。そしてこの点を過不足なく説明した文法書は、いまだない。

## 2. 従属的・非従属的二重主語

二重主語文の内的機能に応じて、大きくこの二つに区別しなければならない。以上に取扱ってきた二重主語文は、その顕在的・潜在的を問わず、すべて  $N_2$  は  $N_1$  の部分・属性に関係し、 $P$  によってその性質・状態を述べているのである。 $N_2$  は  $N_1$  と密接な関係があるから、 $N_2$  にさらに  $-nja (=N_1$  の) が接尾されることも一般である(なお、3. 参照)。また、仮に、DM の規則に従って所属関係の表現法、つまり「 $N_1$  の  $N_2$  は」という言い方によっても、意図するところは伝えられる。このような場合を、従属的二重主語と名付けるならば、一方で、それとは平行しない二重主語表現法がある。例えば、

Hari ini keras hudjan. 「今日は雨が激しい」

Hari ini turun hudjan. 「今日は雨が降る」

において、 $N_2$  は  $N_1$  の部分を示すものではなく、また、その性質を述べているのでもない。もし、所属関係的に Hudjan hari ini keras., Hudjan hari ini turun. とすれば、「今日の雨は激しい」、「今日の雨は降る」となつて、その意図されているところとは全く別になるか、不可能になる。 $N_2$  と  $N_1$  との関係は密接でなく、また、 $P$  は、 $N_1$  における  $N_2$  の状況に言及しているにすぎない。従つて、この場合の  $N_2$  に  $-nja$  が付加されるとは、論理的には、 $N_2$  名詞化のための

-nja を除いて、不必要であることになるが、実際には、従属の場合と同様に、接尾されることが多い。-nja は単なる口調のためにほとんど無意味で使われることも多いからであるが、もちろん、 $N_1$  以外のある物・者を差している場合もある。このような二重主語文には、非従属的という名称を与えて、従属的とは区別しよう。

Hanja belakangan ini pikirannya agak diganggu sedikit oleh sebuah bajangan laki<sup>2</sup>. (Lub, p. 52) 「ただ近頃は (=belakangan ini) 彼女の (=nja) 思考が (=pikiran) ある男性の幻影によって少々妨げられていた」(Yet recently her thoughts had been troubled by the form of a man.)

„Saja ada pengalaman pak,” Dullah bertjerita sendiri. (Lub, p. 64) 『『自分は (=saja) 経験が (=pengalaman) ありますぜ』, アブドウラーはひとりで喋った』(‘I’ve had some brushes with their soldiers.’ Abdullah said.)

Masyarakat kita sekarang penuh pertentangan, (Pan, p. 120) 「現在のわれわれの社会は矛盾が (=pertentangan) 満ち満ちている」(Our society is now full of contradictions.)

この場合の  $N_1$  は、場所性・時間性を指示し、またはそれを重視していることが普通であり、 $N_1$  は前置詞を伴って（その際、 $N_2$  はもはや  $N_2$  ではなくなり、単に主語 [=S] として立つことになる）現われることも多い。

Dia ada uang serupiah. 「彼は一ルピアの金がある」は、  
Ada padanja uang serupiah. 「彼に（は）一ルピアの金がある」

とすることもできる。このような非従属的二重主語文における、「～は」( $=N_1$ ) が「～には、～では」、さらに、「～に、～で」ともいい得る現象は、日本語の場合と共通する。この場合の  $N_1$  を前置詞句に代えていうことが多いのは、現代の傾向といい得るであろう。

dimasa Djepang telah timbul satu angkatan jang merasa lain dari Pudjangga Baru, (Jas, p. 48) 「日本時代には新文学者<sup>ブーゲンガ・バル</sup>とは異った感情を持つ一つの世代が (=satu angkatan) 既に誕生した」

Dalam Gelanggang ini berhimpun sasterawan<sup>2</sup> dan pelukis<sup>2</sup> muda terkemuka. (Jas, p. 53)

「この競技場には有名な若手の文学者・画家が (=sasterawan<sup>2</sup> ～) 集まった」

ただし、 $N_1$  に場所性を加えることは、 $N_1$  を直接的対象からそらすことになり、殊に、王・高位高官の人に対してそれを  $N_1$  とするには恐れ多い場合、この表現が婉曲法 “euphemism” として採用される。マライ語の古文学に特に多いのは、このような婉曲法である。

Maka adapun akan radja Kida Hindi itu, ada beranak seorang perempuan telalu baik parasnja, (SM, p. 4) 「ところで、キダ・ヒンディ王におかれては (=akan radja K. H. itu), 容姿が (=parasnja) 誠に端麗な姫 (=anak seorang perempuan) がおられた」(潜在的、補語中における二重主語文がある)

Adapun akan bendahara seri Maharadja banjak anaknja, (SM, p. 227) 「ところで、聖大王

の宰相におかれては(=akan bendahara ~), 御子息が(=anaknja)多かった」(題在的, 基本形式の  $N_1$  は前置詞句に変えられている)

### 3. $N_2$ について

i. -nja の省略:  $N_2$  に接尾される -nja は,  $N_1$  を再び繰返して一般に「その～(が)」を意味することになるが, 名詞的類以外の類を名詞化するために添えられた -nja は, むしろ機能として重要なのはこの方であって ( $N_2$  は必ず名詞的類でなければならない), 「その」という意味的働きはほとんどないと考えられる。つまり,  $N_1$  を重複するための -nja の接尾は, 必然的ではない。繰返して「その」とする傾向は自然的成行には違いないが, 本来的に,  $N_1$  との意味的關係・文中における位置によって,  $N_2$  としての性格は既に明らかであるからである。

Embatjang buruk kulit. (Peri, 828)「野マンゴー(Mangifera odorata Griff) は皮が(=kulit) 醜い(能ある鷹は爪かくす)」

Bagai kambing harga dua kupang. (Peri, 1257)「(山羊は) 値が(=harga)二十セントの山羊のよう(子供じみた行ない)」

Takkan dua kali orang tua kehilangan tongkat. (Peri, 1947)「老人は(=orang tua) 杖が(=tongkat) 二度とは無くならない(賢者は二度過たず)」

Uang Djepang itu turun harga. (Pan, p. 105)「日本の金は値打が(=harga)下がった」(The value of Japanese currency went down.)

Sebagai seorang jang kehilangan akal, Marjam menangkup ditempat tidur anaknja. (Ham, p. 55)「あたかも思慮が(=akal) 無くなった人(=seorang) のように, マリヤムは子供の寝台にうつぶせた」(Marjam flung herself face down on her son's bed like a person bereft of her senses.)

また, 日本語で「皆」「大部分」などが  $N_2$  に立つと, 「が」が省略される傾向があるが, インドネシア語でも, これらの語が  $N_2$  として立つと -nja は省かれることが多い。

Orang itu semua (または semuanja) berasal dari negeri Anu.<sup>32)</sup>「その人たちは皆(が) 某国出身だ」

Kesusasteraan dimasa Djepang sebahagian besar dalam bentuk dan visi masih menurut djedjak<sup>2</sup> Pudjangga Baru. (Jas, p. 49)「日本時代の文学は大部分(=sebahagian besar), 形式とヴィジョンとにおいて新文学者の歩みに追従した」

ii.  $P-N_2$  の成句化:  $N_2$  に -nja が接尾されないことによって,  $N_2$  はその独立性を失い,  $P$  と強固に結び付いて一つの成句を形成する場合が, 一方である, i. の場合, -nja がなくとも  $N_2$  は依然として独立しているけれども, 語彙の中でも特に  $P$  と合成しやすいもの, すなわち, 人体各部分の呼称およびそれに附随した概念を持つ語彙において, 著しくこの現象が起こっていることが観取できる。その成立過程について, 例えば, まず,

Orang itu keras kepalanja.「その人は頭が固い」

があり, その -nja はついに落ちて

Orang itu keras kepala. 「その人は頑固だ」

となった,<sup>30)</sup>その理由は文を引立る „keindahan” ためである<sup>31)</sup> という説明も一つの考えであろう。(もちろん、元来が二重主語文でない *Penumpang kapal itu mabuk laut*. 「船客は船酔している」[*mabuk* 「酔う」, *laut* 「海」]などの成句は、この場合、論外である。)このような成句となった部分に対して、日本語では、漢語からの借用語を当て得る場合が少なくない。

*Dia sakit perut*. 「彼は腹痛だ」(この文型において *parutnja* とは決してできない。従って、「彼は腹が痛い」に相当する表現は、もはや、存在しないことになる)

*Mereka itu baik hati semuanya*. (*Isk*, p. 21) 「彼等は皆が親切だった」(*baik* 「良い」, *hati* 「心」が合成して、この二重主語文の基本形式における *P* となっている。つまり「～は心が良い」という意識は、もはやない)

また、このような成句の名詞への転用すら一部で起っている。

*bukan main sakit hati saja*, (*Isk*, p. 16) 「私の心痛はただごとでなかった」

*bukan main besar hati kami melihat keadaan itu*. (*Isk*, p. 41) 「その状態を見て、われわれの興奮はただごとでなかった」(*besar* 「大きい」)

なお、その他に、*pandjang akal* 「用意周到(な)」(←「思慮が行届く」), *pandjang mulut* 「饒舌(な)」, *pandjang hati* 「辛抱(強い)」, *panas hati* 「憤怒(した)」(←「心が熱い」), *dingin kepala* 「冷静(な)」(←「頭が冷たい」), *ketjil hati* 「臆病(な)」(←「心が小さい」), *baik budi* 「総明(な)」(←「智力が良い」)などのような例は数多い。

iii. 一・二人称の場合：これまでに掲げてきた二重主語的例文は、非従属的として掲げた一例を除いて、すべて  $N_1$  が三人称に相当するものばかりであった。確かに、一・二人称が  $N_1$  となって二重主語が構成されることは少ない。<sup>32)</sup> まず、「私は背丈が一メートル半だ」を考えてみよう。これに対して、*Saja satu setengah meter tingginja*. といって、分からないことはない。しかし、 $N_2$  としての *tingginja* は、文末にあって名詞化の *-nja* が *tinggi* 「高い」に接尾されているとはいえ、この *-nja* が三人称の所有代名詞的接尾辞「彼(等)の」としての機能をも持っているために、あえてこの表現法を避け、*Tinggi saja* ～. または *Tinggiku* ～. 「私の背丈は～」のように所属関係的な表現法に言代えられるのである。要するに *-nja* の持つ機能の多様性が、一・二人称による二重主語文を発生させ得なかったともいえる。( *-nja* に対して、一人称 *-ku*・二人称 *-mu* がその接尾辞である[いずれも単数の場合]。しかし、これを使って *\*Saja satu setengah meter tinggiku*. のようには決してしない。主語が一・二人称の場合、文中に再び所有代名詞を用いることはない。論理的に不必要だからである。この点で、英語・オランダ語などにおける所有代名詞の用法と大いに異なっている。) ところで、第Ⅱ章 *Pané* の項でも触れたように、*tingginja gunung* 「山の高さ」の *-nja* が省き得るのは、このような一・二人称の所属関係的な表現法が大きく影響していることが明らかである。*tingginja gunung* の *-nja* の省略は、このように相関関係的に見ることによって、この現象は説明されなければならない。

なお、本章の ii. で扱った成句に対しては、一・二人称も問題なく用いることができる。もはやここには、-nja が使用されていないからである。ただし、既に二重主語表現的機能は失ってしまっているけれども。

Saja sakit perut. 「私は腹痛だ」(また, Perut saja [Perutku] sakit. 「私の腹が痛む」) としてもよい。全人称についてこの表現はできるけれども、もちろん、それは成句的表現形式ではない。なお、IV. 1 参照)

iv. -nja の固定:  $N_2$  に付いた -nja は、名詞的類を  $N_2$  たらしめるための、いわば固定化の作用があったことは、既に述べた。そのような作用は、形容詞の比較級にまで及ばされて、それを二重主語文に代えようとする新らしい傾向すらある。

Anak saja sama tinggi dengan anak si Taib. 「私の子供はタイプ君の子供と同じ背丈だ」

Besi kurang berat dari pada timah. 「鉄は錫より重くない」は、

Anak saja sama tingginya dengan anak si Taib. 「私の子供はタイプ君の子供と背丈が同じだ」

Besi kurang beratnja dari pada timah. 「鉄は錫より重さが少ない」<sup>36)</sup>

とされ、前者の同等比較は既に一般的になっているが、優・劣比較における -nja の使用は、ほとんどの文法書で説かれていないほど(つまり、まだ口語的である)、新らしい。このような -nja の使用の拡大化がある反面で、-nja が  $N_2$  において安定化し、 $N_2$  は -nja とともに形骸化して、その機能をほとんど停止・消失してしまったと考えられる形式が一方である。そのような種類のかつての  $N_2$  nja には、rupanja, rasanja, tampaknja=kelihatannja, agaknja, kiranja などがある。それぞれ、文中にあって「～のようだ(=it seems)」、「感じられる」、「～のように見える(=it looks like)」、「恐らく」、「思われる、願われる」を意味するが、由来的には、それぞれ、「それは様子が～」、「それは見かけが～」、「それは感じが～」、「それは推測が～」、「それは思いが～」のように二重主語文における  $N_1$  としての「それは(=itu)」が省略された形式に基づいていると考えなければならない(なお、 $N_1$  の省略については次章参照)。そのことは、これらが完全にはその  $N_2$  としての機能を停止してはいず、やはり依然として  $N_2$  として立ち得ることからも明らかである。

Hazil rupanja telah kenal dengan mereka semua. (Lub, p. 65) 「ハジルは様子が彼等すべてを識っていた」(Hazil apparently knew all of them.)

Kamar itu rasanja suram. (Lub, p. 28) 「その部屋は感じが陰気だった」(The room felt overcast.)

ところが、次の例では、その位置・他の語との関係からしても、 $N_2$  としての機能は、もはや見出せない。

Ku-raba<sup>2</sup>, rupanja sakitnja itu djanh dibelakang, (Pan, p. 106) 「私がまさぐってみると、痛みはずっと奥の方にあるようだった」(I poked around, and the place where it hurt seemed

to be way in the back,)

Rahim hendak menangis keras<sup>2</sup> karena tak tahan sakit, rasanja petjah anak telinganja.

(Ham, p. 50)「ラヒムは痛みに耐えかねて大声で泣出したいくらいだった。鼓膜が裂けたかのように感じられたから」(Rahim started to cry hard because of the unbearable pain; it felt as though his eardrums were broken.)

Tidak ada obat agaknja jang lebih mudjarab dari itu? (Isk, p. 21)「それよりもっと効く薬は、恐らく、ないのであろうか」

この agaknja の -nja について、Alisjahbana は、その意味がぼやけた „kabur” ものといっている。<sup>37)</sup>それが機能の低下のことを指しているのなら、その指摘は正しいといえよう。

v.  $N_1 \cdot N_2$  の反転性<sup>38)</sup>：日本語では  $N_1$  と  $N_2$  とを入替で、例えば、「象は鼻が長い」を「鼻は象が長い」とすることもできる。しかし、インドネシア語では、 $N_1$  と  $N_2$  との位置の入替だけで、それを表現することは不可能である。Belalai pandjang pada gadjah. のように前置詞 pada を用いればそのニュアンスをいくらか写すことはできる（つまり「鼻は象において長い」）。ただし、これは、もはや二重主語文ではない。それは、非従属的な場合においても同様であって、「今日は雨が激しい」を「雨は今日が激しい」とした場合、Hudjan keras pada hari ini. 「雨は今日この日に激しい」とすれば、大体、日本語の表現に近くなる。要するに、インドネシア語には、日本語に見られるような二重主語文の反転の自由性はないといつてよい。

#### 4. $P$ について

$P$  となり得る要素として、まず重要な事柄は、それが名詞的類であってもよいということであって、インドネシア語では copula 的 ada が特に強制的に置かれる場合を除いて、普通の現象である。この点、体言止の習慣もある日本語においては、理解が困難な事柄ではないが、西洋人には、第Ⅱ章 Phillips の項でも触れたように、しばしば混乱・誤解がある（なお、本章1. 述語中、参照）。次に、副詞的類もそのみで  $P$  として立ち得る。日本語では、「～は～が大変だ（非常だ）」といえ、それに当るが、インドネシア語でこの使用は頻繁である。

radja hamba terlalu amat sekali kasihnja akan radja Iskandar, (SM, p. 5)「わが王はイスカンダール王への愛情が(=kasihnja)並外れて非常に(=terlalu amat sekali)(深かった)」  
Pikirannja amat katjaunja, (Lub, p. 18)「彼の考えは(=pikirannja)混乱が(=katjaunja)激しかった(=amat「非常に」)」(He was very disturbed.)

Hati Mr. Kamaruddin amatlah katjau<sup>2</sup>nja, (Lub, p. 44)「法学士カマルッディンの心は当惑が激しかった」(Mr. Kamarudin was very confused.)

ところで、この二重主語表現の発生と特に深い関係を持つ ke-an について述べておこう。泉井久之助氏は、日本語における  $N_2$  に触れて、その「が」には非人称的な含みがあり、それは人間を超越したある大きな力“superior force”を持つものが働く場所“spot”を示したものであろうと、<sup>39)</sup> 説いていられる。要するに、二重主語的表現の契機として、人間が自ら制御するすべの

ない、すなわち、人間の意志にかかわらず起こる現象が、一つの要因としてそこに加わることになるが、この点に関して、たとえそのような助詞はないにせよ、*P* に *ke-an* が現われる二重主語表現において、それを如実に実証することができる。動詞的類としての *ke-an* には、その機能として無意図的に “unintentionally” ある行為が外部から働き、また、加えられることを示すにある。<sup>40)</sup>つまり、*N*<sub>1</sub> の意図にかかわらず、*N*<sub>1</sub> にはある状態が降懸ってくるのであってそこには被害（被災）性 “suffering” の概念が顕著である。また、この表現は従属的・非従属的のいずれでもあり得る。これを単に受身と見て、その受動性をのみ強調してしまってよいものではない。<sup>41)</sup>

Rumah itu kemasukan pentjuri. 「その家は泥棒がはいった」

Ali ketjurian sepeda. 「アリは自転車盗まれた」

Sekolah itu kekurangan buku. 「その学校は本が足りない」

Guru itu selalu kehabisan waktu. 「教師はいつも時間がなくなる」

Seperti lampu kekurangan minyak. (Peri, 1601) 「(ランプは) 油がなくなったランプのよう  
(風前の燭、または、創口に塩)」

Anak itu kehilangan akal, (Isk, p. 249) 「その子供は思慮が無くなった」

なお、同じく偶発的行為を示す動詞的類に *ter-* による形式がある（ただし、これには被害性の概念はない）。しかし、これは二重主語文における *P* となることはできない。そして oleh 「によって」の導入により、その受動的形態は、現代語においてますます整えられつつある。

Orang itu, uangnja terdjumpa oleh polisi.<sup>42)</sup> 「その人は、金が警官によって見つけ出された」  
ところが、形容詞的類についた *ter-* は、*P* として現われることができる。

Ahmad itu termasuk beraninja. 「アフマドは勇気が有名だ」

この場合は *ter-* は、基本的には最上性 “superlative” を表わす機能があるが、それはさらに強調的に単に添えられている場合も多い（*termasjhur* の *ter-* は落しても、*P* として、一向に差支えない）。従って、動詞的類への *ter-* と、形容詞類との *ter-* とは、二重主語現象の解釈においても区別しなければならない。

#### IV. 不完全二重主語文

以上の章で扱ってきたのは、*N*<sub>1</sub>, *N*<sub>2</sub> を備えたいわば完全な二重主語文であった。しかし、実際の文中・会話中に現われるのは、このような完全形であるよりは、むしろ本稿で説明する不完全形の方が多い。つまり、不完全形とは、*N*<sub>1</sub> か *N*<sub>2</sub> かのいずれかが欠けて、実際には現われてこない場合である。省略という現象は、インドネシア語においてよほど重要であって、これまでの諸家は、生成文法論者を含めて、この点を全く無視して文法の説明に当たっていたと思われる。その代表として Alisjahbana を取ろう。<sup>43)</sup> 補<sup>2)</sup>彼は、Rumah itu besar. 「その家は大きい」, Djalannja

tjepat.「歩き方(歩み)が速い」を、どちらも主語—述語を持つ同じ文とみなしている。確かに外形的にはそうであろう。しかし、この文は、本来的に(本質的に)その性質を異にしている。つまり、前者は話者・読者において既に了解されている「何かが大きい」のであり、後者は「何かは速い」のである(例えば, Rumah itu besar rupanja.「その家は格好が大きい」, Dia djalan-nja tjepat.「彼は歩き方が速い」という状況も存在するであろう)。要するに、前者は  $N_2$  が、後者は  $N_1$  が省略されている。この二つの文はその本来の性質において違ったものであることを、十分に認識しなければならない。外形的な姿のみを捕らえて、無理に全体とのつじつまを合わせることをしてはならない。インドネシア語における外顯的な文法的要請は、西欧語におけるほどの拘束力を持ってはいない。むしろ内容的要請がそれに勝ることが多い。ここでインドネシア語では、「不必要な(余計な)言葉はいわない」という前提があることを絶えず喚起する必要がある。この点は、前論文の属能的二重主語文の場合にも当てはめていうことができ、その属能の場合には、 $N_1$  を落し得るから、だからこそこれを受動形などということとはできないと、私は説いたのであった。

#### 1. $N_1$ の省略

例えば、

Gajah besar, belalainja pandjang.「象は大きく、鼻が長い」

なる文においては、前部分が  $N_1-P$ 、後部分が  $N_2-P$  という構成である。前部分では既に共通的に分かりきった tubuhnja「体が」( $=N_2$ ) が省かれているのであるし、後部分では、前部分の gajah を  $N_1$  として承けてはいるが、しかしそれ省き、この文全体は、それぞれ性質を異にする二つの文よりなっている。このようないわゆる「重文」の形成に際し、後部分の文は  $N_1$  を省略する。この例のように比較的近い場所に  $N_1$  が存在する場合もあるが、遠く離れている場合、また、全く存在しない場合すらある。例えば、先の例, Perutku sakit.「私の腹が痛む」では、 $N_1 (=saja$ 「私は」) が全く省かれている。 $N_1$  は既に明らかなからである(Ⅲ. 3. ii. 参照)。この例は大変多い。その中のいくつかを掲げておこう。

Memagar kelapa tjondong, buahnja djatuh keladang orang (Peri, 1340)「曲った椰子を垣根にすると、(椰子は) その実が ( $=buahnja$ ) 他人の 畑に 落ちる (犬骨折って鷹にとらる)」  
Bapak burik anaknja tentu rintik. (Peri, 322)「父は疱瘡病み、子供がまた疱瘡病み (瓜の種に茄子は生えぬ)」

Maka peluru meriam itupun datang mengenai segala orang Melaka, ada jang putus lehernja, ada jang putus pinggangnja, ada jang putus pahanja, ada jang petjah kepalanja. (SM, pp. 270-271)「大砲の玉はまた飛んできて全マラッカ人に命中した。(マラッカ人は) 首が折れたもの、腰が砕けたもの、股が裂けたもの、頭が潰れたものがいた」

maka bedilpun dipasang orang, terlalu azimat benjinja, (SM, p. 303)「鉄砲はまた点火されて、その音が非常に猛烈だった」



Harum baunya, bagai kesturi. Parasnja elok, tjantik molek. (Isk, p. 87) 「(彼女は) 麝香のようにその薫が馥郁としていた。(彼女は) その容貌が可愛いく、美しかった」

Suaranja bertambah hangat: „Apa buktinja? ~” (Pan, p. 104) 「(彼は) 声が (=suaranja) ますます激昂して『(それは) 証拠が何か? ~』」 (His voice grew more heated: “And what happened? ~.”)

Harganja kebetulan turun sekali. (Pan, p. 105) 「(金は) 値が (=harganja) 偶々非常に下がっている」 (As it happened, there was one for sale quite cheap.)

Marjam masih muda, umurnja belum tjukup 30 tahun, anaknjapun hanja seorang, (Ham, p. 43) 「マリヤムはまだ若く、年令が三十に満たず、また子供が一人しかいなかった」 (Mariam was still young, under thirty, and she had only one child,)

Terutama katanja, ia telah tua, anaknja kian lama kian besar djuga, ajahnja tidak tentu entah dimana. (Ham, p. 44) 「殊に (母は) 言葉が (=katanja) このようだった (=こういうのだった), 彼女はもう年取っているし, (彼女は) 子供が日に日に大きくなってくる, (子供は) 父親が行方不明だというのに」 (In particular, she said that Marjam was old now, and she had a son who was getting bigger all the time, while his father had vanished without a trace,)

## 2. $N_2$ の省略

$N_1$  の属性をあえて  $N_2$  として立てて述べる必要のない場合,  $N_2$  は省略される。例えば,

Pohon itu tinggi (tingginja). 「その木は (高さが) 高い」

Sungai itu tohor (airnja). 「その川は (水が) 浅い」

Kue ini kurang enak (rasanja). 「この菓子は (味が) 美味しくない」

などの  $N_2$  は省略しても, 何ら意味的混乱は来たさない。にもかかわらず, このような  $N_2$  を立てて, その属性を明確にすることもできる。既に掲げた例を再び引用するなら,

ketika kami sampai pada sebuah djambatan sungai jang tohor airnja, (Isk, p. 49)

Kalau sambal kurang enak rasanja, (Ham, p. 46)

のようにも使われていた。

要するに,  $N_2$  の省略の決定は, 文脈において, また,  $N_1$  と  $P$  との相関関係において, 行なわれることになる。それを規則化することは, むづかしい。従って, 論理的には一見不必要な  $N_2$  が現われることすらある。

Sjahdan bunji buluh perindu itu terlalu merdu bunjinja, (SM, p. 234) 「ところで, その竹笛の音は音が (=bunjinja) こよなく美しかった」

ところで,

„Elok benar nama itu.” Demikian dia berkenalan dengan kami. Dan dia hanja guru biasa sadsja. Kalau dia berkata dengan mengedjekkan: „Buruk nama itu,” ~ (Isk, p. 164) 「『そ

の名前は本当にきれいだね』。かくて彼はわれわれと知合った。彼はただ普通の教師だった。もし彼が嘲りながら『その名前はよくないね』といていたら ～」

この文では、 $N_2$ としての「(その名前は) 意味が (=artinja)」が省略されていることが遙か前文から分かる。そしてそれは、例えば、決して「聞えが」「語路が」などがここで隠されているのではない。

このような例は比較的単純であるけれども、単に外形的語形をのみ重視して、それに頼っている限り、インドネシア語の深い内的理解・読みに到達し得えないことはいうまでもない。この点、いかに構造的・生成的分類法に徹しようとも（特に後者は、その深層構造において、現実にはそう云わないことすら、実際には何の証明力もないままに、あえて設定するという行過ぎを犯すから、もはや論外とすべきかもしれない。証拠のない論は科学でなく、単なる主張である）、依然として不完全性を露呈することになる。そして、二重主語文的見地からも、インドネシア語における頻繁な省略現象の重要性を、ここに改めて強調しておきたい。

#### 註

- 1) И. И. Ревзин: Какого значения малайско-полинезийских языков для общей теории моделирования языка?, *Вопросы Структуры Языка*. Москва 1964, pp. 104—116.
- 2) J. D. Bowen: *Beginning Tagalog*. Berkeley/Los Angeles 1969. 要するに、タガログ語の受動形は英語のそれと “not really a very close one” (p. 182) とし、あえて受動形という用語を斥け、object focus (目的語中心文) とのみ名付ける。
- 3) B. L. Whorf: *Language, Thought, and Reality*. Massachusetts 1966, pp. 264—265.
- 4) 泉井久之助「語順の原理」, 『言語の研究』. 東京/京都 1956, pp. 186—215. 特に p. 208—, 同「二重主語の構文と日本語」, 『言語の構造』. 東京 1967, pp. 137—152., 同「文の理解と二重主語の現象」, 「追記」, *Ditopical expression in Japanese and other languages*, 『言語の世界』. 東京 1970, pp. 26—28, pp. 32—34, pp. 427—430.
- 5) C. A. Mees: *Beknopte Maleise Grammatica*. 's-Gravenhage/Semarang/Soerabaya/Bandoeng 1938 (3rd ed.), pp. 45—49., この増補版. *Tatabahasa Indonesia*. Bandung 1953 (3rd ed.), pp. 117—124.
- 6) Armijn Pané: *Mentjari Sendi Baru Tata Bahasa Indonesia*. Djakarta 1950, pp. 203—204.
- 7) Armijn Pané: *loc. cit.*, pp. 202—207, pp. 395—396.
- 8) Sutan Muhammad Zain: *Djalan Bahasa Indonesia*. Djakarta 1954 (9th ed.), pp. 58—59.
- 9) Oemar Sastradiwirya: *Penguraian Kalimat*. Djakarta/Amsterdam 1954, p. 6.
- 10) Sutan Muhammad Zain: *loc. cit.*, p. 59.
- 11) A. A. Fokker: *Beknopte Grammatica van de Bahasa Indonesia*. Groningen/Djakarta 1950

- (4th ed.), pp. 69—70., *Inleiding tot de Studie van de Indonesische Syntaxis*. Groningen/Djakarta 1951 (この書物は、後に、Djonhar によってインドネシア語訳された。 *Pengantar Sintaksis Indonesia*. Djakarta 1960.), pp. 31—32, pp. 60—62.
- 12) Armijn Pané: *loc. cit.*, p. 204.
- 13) A. A. Fokker: *loc. cit.* 1951, p. 25.
- 14) H. Kähler: *Grammatik der Bahasa Indonesia*. Wiesbaden 1965 (2nd ed.), pp. 80—81.
- 15) Madong Lubis: *Paramasastera Landjut*. Amsterdam/Djakarta 1952 (4th ed.), pp. 141—142. そしてこれはジャワ語からの影響である。Sutan Muhammad Zain: *loc. cit.*, p. 58. Zuber Usman: *Kedudukan Bangsa dan Bahasa Indonesia*. Djakarta 1960, p. 85.
- 16) J. P. Sarumpaet/J. A. C. Mackie: *Introduction to Bahasa Indonesia*. Melbourne 1967 (Reprinted ed.), p. 92.
- 17) M. B. Lewis: *Sentence Analysis in Modern Malay*. Cambridge 1969, pp. 50—58.
- 18) M. B. Lewis: *loc. cit.*, p. 43.
- 19) 少なくとも二重主語文に関して、Payne の博士論文でこのような誤った分析が既に試みられている。E. M. F. Payne: *Basic Syntactic Structures in Standard Malay*. Thesis, University of London, 1964. この論文の内容の一部は註22) の Phillips の論文によって知ることができる。
- 20) Asmah Haji Omar: *Morfoloji—Sintaksis Bahasa Melayu (Malaya) dan Bahasa Indonesia: Satu Perbandingan Pola*. Kuala Lumpur 1968, p. 20., Asmah Haji Omar/Rama Subbiah: *An Introduction to Malay Grammar*. Kuala Lumpur 1968, p. 96.
- 後の書物で使われている N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub> は、もちろん、二重主語を指すのではなく、彼女のいう N<sub>2</sub> とは “object” のことである (p. 9)。
- 21) W. Havers: *Handbuch der erklärenden Syntax*. Heidelberg 1931, p. 38. において、現代ギリシア語 *ἕνας χωριάτης ἐπέθανε τὸ παιδί του* に忠実に対応するドイツ語を „ein Bauer, es starb das Kind desselben“ としている。ここの Bauer, Kind はともに主格である。そしてこの文は、インドネシア語の Petani itu kematian anaknja. 「その百姓は子供が亡くなった」にまさに相当する。
- 22) N. G. Phillips: Topic clauses in Malay, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. Vol. XXXIII Part 3, 1970, pp. 560—572.
- 23) N. G. Phillips: *loc. cit.*, BII i (=v. c., ke—an form) の例。彼は、これを Tje Hasan itu=T, abangnja=S, kehilangan=P, rumah=C と分析する。もちろん、誤解である。なお、註21) 参照。
- 24) G. Coedès: Les inscriptions Malaises de śrīvijaya, *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient*. Tome XXX, 1930, pp. 29—80. のうち p. 39.
- 25) Ādiparwa. Jogjakarta 1958, Vol. I, p. 12, Vol. II, p. 113.
- 26) Ādiparwa. Vol II, p. 43.
- 27) Husain Munaf: *Tatabahasa Indonesia* Vol. I. Djakarta 1951 (2nd ed.), p. 9.
- 28) Husain Munaf: *loc. cit.*, p. 148.
- 29) jang が接続詞的に使われる用法は、現代語でもその口語（また俗語ともいわれる）に残っている。

Hari hanya petir<sup>2</sup> sadja, sih dan saja tidak kira *jang* hari akan hujan hingga saja sampai kerumah. 「ただ雷が鳴っているだけじゃないか、ええ、家に帰りつくまで雨は降らないと (=jang) 私は思うがね」。Sutan Sulaiman: *Daily Conversation Book*. Djakarta 1961 (4th ed.), p. 33 より。この会話書は口語 (しかし, living language) を記している点で異色である。

- 30) *Hikajat Radja-Radja Pasai*. R. O. Winstedt/C. O. Blagden: *A Malay Reader*. London 1930, p. 33, p. 37. より。
- 31) N. G. Phillips: *loc. cit.*, A I Ø-fom (=v. c.) の例。彼は, これを *sajur ini*=T, *semuanja*=C, *dia*=C, *beli*=P と分析する。もちろん, 誤解である。
- 32) Sutan Muhammad Zain: *loc. cit.*, p. 69.
- 33) Madong Lubis: *loc. cit.*, pp. 124—125.
- 34) Husain Munaf: *loc. cit.*, pp. 147—148.
- 35) N. G. Phillips: *loc. cit.*, p. 561. 彼のいわゆる Topic として, 一・二人称代名詞が立つことがない, と彼はいう。
- 36) Madong Lubis: *loc. cit.*, p. 127. からの例文。
- 37) S. Takdir Alisjahbana: *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*. Vol. II. Djakarta 1963 (24th ed.), p. 51.
- 38) これについては, 泉井「二重主語の構文と日本語」, *loc. cit.*, pp. 148—151. 参照。
- 39) 泉井『言語の構造』, pp. 78—79., 『言語の世界』, p. 33, p. 428., 『言語の研究』, pp. 307—319. 特に p. 311—。
- 40) これについての説明は, J. P. Sarumpaet/J. A. C. Mackie: *loc. cit.*, p. 71. R. R. Macdonald/Soenjono Darjowidjojo: *Indonesian Reference Grammar*. Washington 1967, pp. 105—107 が簡単ながら, 要を得ている。
- 41) S. Takdir Alisjahbana: *loc. cit.*, pp. 35—38.
- 42) N. G. Phillips: *loc. cit.*, A II 2 (=v. c., ter-form) の例。彼は, これを *orang itu*=T, *uangnja*=S, *terdjumpa*=P, *oleh polisi*=C と分析する。*oleh polisi* はまさに C である。しかし, この文型からも明らかなように動詞的類の *ter-* 形式には必ず *oleh* による補語の導入が要求せられる。しかし, これは私の説く二重主語文の基本形式には属さず, それとは区別しなければならない。
- 43) S. Takdir Alisjahbana: *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*. Vol. I. Djakarta 1963 (33rd ed.), p. 58.

補1) A. A. Bodenstedt の博士論文, *Sprache und Politik in Indonesien, Entwicklung und Funktionen einer neuen Nationalsprache*. Dissertationsreihe des Südasien-Instituts der Universität Heidelberg 1966. は, インドネシア語そのものを具体的に扱ったものではないが, 言語は, 人間の思想・行動を規定する体系 „Herrschaftsordnung“ であるという前提のもとに (第 I 章), インドネシア語がインドネシアで共通語として普及する過程において, 為政者・文化人たちが政治的・文化的企図を実現するために, いかにインドネシア語を意図的に利用したか, を説く。ここで論じられている言語形式の政治・社会形式に対する連繫 (後者は前者によって拘束される関係にある, つまり „sprach-

liches Verhalten“) は、いうまでもなく、ドイツ的言語哲学観によっているのであるが、本論で私が言及した言語被拘束性 „Sprachgebundenheit“ は、そういった形而上的・観念的段階についていっているのではなく、より具体的な事柄である。

補2) Alisjahbana 文法が教育の現場で多く採用されていることは、わが国の橋本文法の現状ともよく似ている。Alisjahbana 文法の解説・紹介書も多い。しかし、そのような亜流において、ここに問題とする文の内的な異質性を指摘したものはいない。例えば、M. Amando: *Uraian Kalimat dan Kata*<sup>2</sup>, *berdasarkan Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia S. Takdir Alisjahbana*. Djakarta 1963 (21st ed.). pp. 5—27. においても。

#### 引用書目略語解説 (ABC順)

- Ham: Dr. Hamka, *Didalam Lembah Kehidupan*. Djakarta 1961 (6th ed.) 第4章, Anak tinggal.  
R. S. Hendon: *Six Indonesian Short Stories*. Translations Series No. 7/Yale University South-east Asia Studies, 1968. に A Deserted Child (pp. 1—18.) と訳され、収められている。  
Isk: N. St. Iskandar, *Pengalaman Masa Ketjil*. Djakarta 1966 (3rd ed.).  
Jas: H. B. Jassin, *Kesusasteraan Indonesia Modern dalam Kritik dan Esei*. Vol. I. Djakarta 1962 (3rd ed.).  
Lub: Mochtar Lubis, *Djalan Tak Ada Ujung*. Djakarta 1952. *A Road with No End*. Translated from the Indonesian and edited by A. H. Johns. London 1968.  
Pan: Armijn Pané, *Kisah Antara Manusia*. Djakarta 1965 (2nd ed.). 短篇中, Sakit gigi. R. S. Hendon: *loc. cit.* に Toothache (pp. 60—96.) と訳され、収められている。  
Peri: *Peribahasa*. Djakarta 1961 (8th ed.). 例文の番号は本書の見出し番号を示す。  
Pol: *Polemik Kebudayaan*. Diterbitkan oleh Perpustakaan Perguruan Kementerian P. P. dan K. Djakarta 1954 (3rd ed.).  
Sing: Amin Singgih, *Membina Bahasa Indonesia*. Djakarta 1963.  
SM: *Sedjarah Melaju*. Menurut terbitan Abdullah diselenggarakan kembali dan diberi anotasi oleh T. D. Situmorang dan Prof. Dr A. Teeuw dengan bantuan Amal Hamzah. Djakarta/Amsterdam 1952. SM の英訳は、C. C. Brown によってなされている。Sĕjarah Mĕlayu or “Malay Annals”, *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*. Vol. XXV Part 2/3, 1952. また、その再版, Kuala Lumpur/London 1970. ただし、それぞれの写本が異なるので、内容的に一致しない部分が多い。